

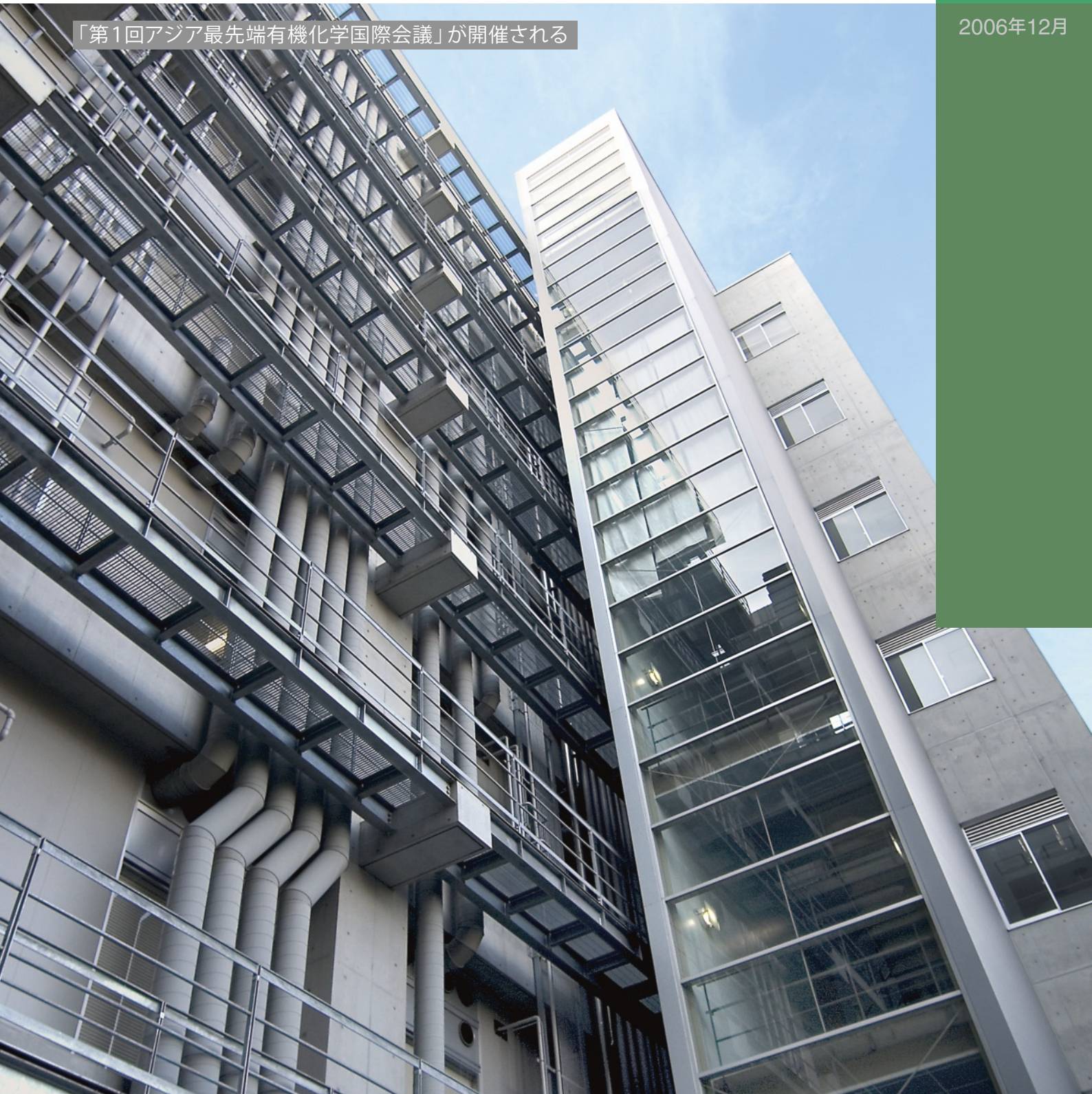
名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.163

2006年12月

「第1回アジア最先端有機化学国際会議」が開催される



目次

●ニュース	
「第1回アジア最先端有機化学国際会議」が開催される	3
NUPACE 設立10周年記念シンポジウム及び交換留学関係者同窓会を開催	5
平成18年秋の叙勲・褒章受賞者決まる	6
平成18年度名古屋大学職員創作美術展を開催	6
出雲駅伝出場選手が総長を表敬訪問	6
平野総長が麻生外務大臣に「日本法の英訳事業」の現状及び	7
「中央アジアにおける名大・法整備支援事業」の進捗状況を報告	
中国のテレビ局が「郁達夫文学碑」を取材	7
平成18年度名古屋大学大学院秋季入学式を挙	8
平成18年度教務学生事務担当者実務研修を実施	8
技術職員研修（装置開発・計測制御コース）実施	9
愛知地区国立大学法人等退職者準備セミナーを開催	9
日本数学コンクール表彰式を挙	9
●知の未来へ	
超音波で探る海溝型巨大地震	10
田所 敬一（大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助教授）	
●職員から	
そもそも論をしましょうか	11
加藤 史征（総合企画室員）	
●学生の元気	
出雲路を駆ける～第18回出雲駅伝～	12
藤永 紘基（工学部機械・航空工学科3年）	
第4回全日本学生フォーミュラ大会2位	13
秋山 友彦（大学院工学研究科マテリアル理工学専攻博士課程前期課程1年）	
●キャンパスクローズアップ	
赤崎記念研究館	14
●部局ニュース	
テクノ・フェア名大2006を開催	16
院生のための大学教授法研修会「シラバスを作ろう」を開催	17
先端技術公開セミナーを開催	17
医学部解剖吊慰祭を挙	18
高麗大学副総長が医学系研究科を視察	18
平成18年度鶴舞公開講座を開催	19
留学生のための就職支援セミナーを開催	19
国際シンポジウム「氷期サイクルの謎にせまる	20
ー氷河時代の気候ダイナミクスー」を開催	
第23回、第24回防災アカデミーを開催	20
「人に優しいバイオマスー最先端木材研究への招待ー」を開催	21
ICCAE 2006年度第7回オープンフォーラムを開催	21
第2回博物館国際フォーラム「次世代教育と国際連携」を開催	22
博物館が第63回、第64回特別講演会を開催	23
第23回オープンレクチャーを開催	23
附属図書館が2006年秋季特別展を開催	24
公開講座「数学アゴラ」秋期継続コースを開講	25
地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」第4回講演会を開催	25
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成18年10月16日～11月15日	26
●イベントカレンダー	30
●ちょっと名大史	
豊田講堂地階倉庫	32

「第1回アジア最先端有機化学国際会議」が開催される





- | | | | |
|---|---|---|-----------------------------|
| | | 1 | 開会式風景 |
| | 2 | 2 | 名古屋メダル特別賞を記念して、 |
| | 3 | 3 | チュラポーン王女殿下（右から2番目）を囲む |
| | 4 | 4 | 開会祝辞を述べる稲嶺沖縄県知事 |
| 1 | | | 4 チュラポーン王女殿下（左）を出迎える平野総長（右） |

「第1回アジア最先端有機化学国際会議」が、10月16日（月）から20日（金）までの5日間にわたり、沖縄県において開催されました。

本会議は、本学が日本学術振興会より採択された「アジア研究教育拠点事業」の課題「アジアの最先端有機化学」の一環として開催されたものです。同課題は、我が国とアジア諸国の研究教育拠点機関を繋ぐ持続的な協力関係を確立することにより世界的水準の研究拠点を構築し、次世代の中核を担う若手研究者を養成することを目的に、平成17～21年度までの4年半の計画で本学を拠点校とし、アジアの5カ国・地域（日本、中国、韓国、タイ、台湾）に拠点校・協力校を置き、日本国内80名、国内外総計160名のアジア地域の最先端有機化学研究者をコア・メンバーとして組織されたものです。

本会議に先立ち、3月8日（水）～10日（金）、野依記念学術交流館において、「アジア拠点連絡準備会議」及び学術

シンポジウムが開催され、最先端有機化学の発展にとっての第一歩となりました。

「有機化学」は発展の著しい分野で、有機合成化学、分子触媒化学、ナノケミストリー、グリーンケミストリー、天然物化学、ケミカルバイオロジー、生物有機化学、有機金属化学等において、我が国のレベルは世界一流であると言われており、今では世界の化学論文発表総数の約30%をアジア諸国が占めている上、医薬農薬を含めた化学工業や材料化学の基幹科学技術として、アジアと日本の関係はますます重要になっています。

今回、沖縄で行われた本会議は、アジア研究教育拠点事業において実施された今年度最大の行事で、アジアのみならず世界の有機化学における記念すべき第1回目の国際会議でもあったため、日本の大学及び研究機関から68名、外国から80名、日本企業から14名、総計162名の著名な最先端の研究者が沖縄に集まりました。



- | | | |
|---|---|-------------------|
| | 5 | 基調講演をするチュラポーン王女殿下 |
| | 6 | 基調講演をする李教授 |
| 5 | 6 | 7 基調講演をする野依特別教授 |
| 7 | 8 | 8 開会式後の集合写真 |

本会議では、タイ王国チュラポーン王女殿下（マヒドン大学教授、ジュラポン研究所所長）や、ノーベル化学賞受賞者である李 遠哲教授（中国科学院院長）、野依良治本学特別教授（理化学研究所理事長）の基調講演が行われました。王女殿下の来日に際しては、那覇空港まで平野総長が出迎え、また王女殿下には、16日（月）の開会式で、野依特別教授より「名古屋メダル特別賞」が授与されました。「名古屋メダル」は、1995年に万有生命科学振興国際交流財団により創設された、国際的に偉大な業績を上げている合成化学研究者に贈られる賞で、王女殿下の受賞は、有機合成化学、癌治療、公衆衛生、環境分野などの国際的学分野における功績によるものです。

開会式では、同事業のコーディネーターを務める磯部 稔生命農学研究科教授から、同事業の計画立案、意義・目的、将来の方向性などについて説明があり、次いで、野依特別教授から、アジア化学ジャーナルの発行をはじめとするアジア情勢の現在と将来について、稲嶺恵一沖縄県知事から、東アジアにおける沖縄の歴史的な位置について、また、山本本学理事から同事業の位置付けと将来について、それぞれ説明が行われました。

19日（木）夕刻には、レクチャーシップアワード委員会が開催され、17日（火）から19日（木）にかけて行われた同会議のメンバーである有機化学研究者による世界最高水準の講演やポスター発表の中から、45件の「講演訪問賞」（レクチャーシップアワード）が選出されました。同賞を受賞した研究者は、2007年に拠点校を訪問し講演を行い、拠点校との頻繁な交流を促進します。

今後の開催予定は、韓国・釜山（2007年）、中国・上海（2008年）、タイ・バンコク（2009年）、台湾・台北（2010年）となっています。

NUPACE 設立10周年記念シンポジウム及び交換留学関係者同窓会を開催



あいさつをする池田文部科学省高等教育局学生支援課留学生交流室長

NUPACE（名古屋大学短期交換留学受入れプログラム）設立10周年記念シンポジウム及び交換留学関係者同窓会が、10月26日（木）、27日（金）、国際開発研究科8階オーディトリウム等において開催されました。

シンポジウムでは、山本理事の開会挨拶に引き続き、池田輝司文部科学省高等教育局学生支援課留学生交流室長による来賓挨拶、野水 勉留学生センター教授によるNUPACEにおける10年の軌跡についての説明がありました。

続いて行われたパネルディスカッションの第1部では、フランスからダニエル アレクサンドル日仏大学交流会館館長（ストラスブール第三大学元副学長・教授）、米国からフランシス A モイヤー ノースカロライナ州ジャパンセンター所長を迎え、西岡 淳日本学生支援機構留学生事業部長、廣瀬幸夫東京工業大学短期留学プログラムコーディネータ・教授と共に、「交換留学プログラムの軌跡－波及効果、成果と今後の展開」と題し、文部科学省「短期留学推進制度」に基づいて発展した短期留学プログラムについて、活発な討議が行われました。モイヤー所長は、NUPACE 発足当初から10年間にわたり、ノースカロライナ州立大学から50余名を本学へ派遣し、同規模数の本学学生の受入れを実現した立役者として、海外になかなか出ようとしないう米学生を目を日本へ向けさせたNUPACEの意義を高く評価しました。アレクサンドル教授も、Program 8と呼ばれる日仏間の学部学生交流プロジェクトにNUPACEが深く関わり、過去5年間にグルノーブル大学群とストラスブール大学群との間でそれぞれ10数名の学生交換が実現した意義を高く評価し、今後の継続及び発展を大いに期待しました。

パネルディスカッションの第2部では、NUPACE 同窓生と交換留学生として海外留学を経験した本学卒業生が討論し、交換留学を経験したことによって世界を舞台に大きな飛躍を遂げている様子を生き生きと語りました。



多文化及び日本語に関する交流イベントの様子

2日目は、伊藤義人全学同窓会代表幹事から、NUPACE 及び交換留学生同窓会の発足が宣言され、続くパネルディスカッションでは、様々な国のNUPACE 同窓生が、日本の文化・習慣の特徴をいろいろな角度から語りました。その後、同窓生を中心に多文化及び日本語に関する交流イベントが催されました。

懇親会では、交換留学生として協定大学に派遣された本学卒業生約20名や、在学中のNUPACE 学生、本学学生が参加し、学生同士や教員と学生との旧交を温める良い機会となりました。また、同窓会に参加できなかった海外の同窓生から150枚もの写真が寄贈され、年代毎にポスターを展示することにより同窓生の思い出を参加者同士で共有することができました。

全体を通じての参加総数は約130名で、NUPACE 同窓生としては、海外から招聘した10名の他に、本学に在学するNUPACE 同窓生、自費で海外から参加した同窓生が加わり、NUPACE 修了生約500名の約1割にあたる40名ほどが集まり、盛況のうちに終了しました。



パネルディスカッションの様子

平成18年秋の叙勲・褒章受章者決まる —本学関係者7名が喜びの受章—

平成18年秋の叙勲及び褒章の受章者が発表され、本学関係者では次の方々が受章されました。

【叙勲】

【教育研究功労 関係】

瑞宝大綬章

加藤 延夫 名誉教授（医学部）、元総長

瑞宝中綬章

服部 秀三 名誉教授（工学部）

瑞宝中綬章

安達 健五 名誉教授（理学部）

【文部行政事務功労 関係】

瑞宝重光章

内田 弘保 元事務局長

【保健衛生・看護功労 関係】

瑞宝双光章

近藤 智昭 元医学部附属病院放射線部診療放射線技師長

瑞宝単光章

足立きぬゑ 元医学部附属病院看護部看護師長

【褒章】

紫綬褒章

道家 紀志 名誉教授（農）

平成18年度名古屋大学職員創作美術展を開催



作品を鑑賞する来場者

平成18年度名古屋大学職員創作美術展が、10月23日（月）から25日（水）までの3日間、シンポジオンホールにおいて開催されました。

この美術展は、職員自ら創作活動を楽しみ、美術作品等の鑑賞を奨励するとともに、潤いのある情操豊かな生活、余暇の一層充実した活用を促し、生活に根ざした文化の普及・高揚に資することを目的として開催するもので、今年度で15回目を迎えました。

今年度は、出展種目も絵画、絵手紙、陶芸、写真、書道及び手工芸と幅広く、多くの力作が展示され、鑑賞に訪れた延べ130名近い職員等は、芸術の秋を心ゆくまで満喫していました。

出雲駅伝出場選手が総長を表敬訪問



記念撮影

体育会陸上競技部の金尾洋治監督及び出雲駅伝出場選手6名が、10月30日（月）、平野総長を表敬訪問し、10月9日（月）に開催された第18回出雲全日本大学選抜駅伝競走（出雲駅伝）の結果を報告しました。

出雲駅伝において、並みいる強豪に伍して、初出場ながら21チーム中18位完走と健闘したことが報告されると、総長は、「テレビ中継で拝見して感動しました。今後も大いに活躍されるよう期待しています」と言葉をかけ、選手一同は、誇りに満ちた表情で、総長との会話を楽しんでいました。

平野総長が麻生外務大臣に「日本法の英訳事業」の現状及び「中央アジアにおける名大・法整備支援事業」の進捗状況を報告

平野総長は、11月8日(水)、佐分理事、松浦法学研究科長、鮎京法政国際教育協力研究センター長とともに外務省を訪問し、麻生外務大臣及び岩屋外務副大臣に対し、「日本法の英訳事業」の現状及び「中央アジアにおける名大・法整備支援事業」の進捗状況を報告しました。

「日本法の英訳事業」とは、グローバル化する世界において、我が国の法令が容易かつ正確に理解されることを目



左から、佐分理事、岩屋外務副大臣、平野総長、麻生外務大臣、松浦法学研究科長、鮎京法政国際教育協力研究センター長

的に、政府主導で進められている法令外国語訳プロジェクトで、本学からは松浦法学研究科長が同プロジェクトメンバーとして参加しています。また、「中央アジアにおける名大・法整備支援事業」とは、同研究科及び同センターが進めている、アジア諸国における法曹人材養成の教育拠点を形成する事業で、ウズベキスタン、ベトナム等の体制移行国から留学生を受け入れ、英語による日本法教育を行うとともに、ウズベキスタン共和国タシケント国立法科大学及びモンゴル国立大学に、それぞれ名古屋大学日本法教育研究センターを設立し、日本語による日本法教育も行うなど、中央アジアの法整備支援を積極的に行っています。

報告の中で、平野総長は、対象国との政治体制の違いや問題点を意識しながら、教育研究機関として真摯な支援をすることが重要である旨の意見を述べ、共同研究をしながら支援を行うところに本学の法整備支援の特色があり、ウズベキスタン共和国における法整備支援活動も、強い人間的絆を作りながら成果を挙げている、との説明をしました。

これを受けて、麻生大臣と岩屋副大臣は、外交から見た中央アジアの重要性について述べ、最後に、法整備支援と法令外国語訳事業の重要性と意義について強い期待を表明しました。

中国のテレビ局が「郁達夫文学碑」を取材

中国杭州テレビ局及び富陽テレビ局一行が、10月27日(金)、豊田講堂東側庭園にある「郁達夫文学碑」において、同氏の生涯ドキュメンタリーを制作するための取材をしました。

郁達夫氏は、大正4年から8年までの4年間、中国人留学生として、本学の前身校である第八高等学校(八高)に在籍しており、魯迅、郭沫若らと並ぶ、中国近代文学における代表的な作家です。著作には、大正時代の名古屋を舞台に、八高時代の体験を基にした青春小説『沈淪』があり、

中国近代文学史上初めて“青春”という言葉を用いた自伝的小説と言われてしています。

同碑は、八高の同窓会である「八高会」により、八高創立90周年を記念して建てられたもので、平成10年6月30日に除幕式が行われています。

当日は、同テレビ局クルー、八高会のメンバー、郁達夫研究が専門の鈴木正夫横浜市立大学名誉教授や、郁達夫氏の令孫で、同氏の故郷の浙江省富陽市にある郁達夫研究会副会長でもある郁峻峰氏ら総勢10名ほどが来学し、同碑を囲みながら取材をするともに、郁達夫氏の波瀾万丈な人生に思いを馳せました。



記念撮影の様子



郁達夫文学碑

平成18年度名古屋大学大学院秋季入学式を挙行

平成18年度名古屋大学大学院秋季入学式が、10月23日(月)、野依記念学術交流館2階カンファレンスホールにおいて挙行されました。今年度より大学院留学生特別コースや大学院医学系研究科修士課程医科学専攻医療行政コース(ヤング・リーダーズ・プログラム)だけでなく、一般の秋季入学式も同時に執り行うこととなりました。

大学院留学生特別コースとは、開発途上国等でニーズの高い分野において、短期間に学位を取得したいという要望に応じて、日本語を用いず英語による研究指導を行うコースで、留学生の大半は、大学推薦による国費留学生で占め

られています。また、大学院医学系研究科修士課程医科学専攻医療行政コースとは、開発途上国の次世代を担う行政官で、原則経験年数5年程度以上の40歳までの方を日本に招き、1年間の英語による教育で修士学位を与えるコースです。今年度は、大学院法学研究科7名、大学院工学研究科15名、大学院環境学研究科6名、大学院医学系研究科15名の計43名が本学で学ぶことになりました。

式典は、総長をはじめ理事、監事、副総長及び研究科長の列席のもと、名古屋大学交響楽団による奏楽で始まり、入学生紹介、総長のあいさつ、役職員等の紹介に続き、大学院医学系研究科のHusain, Muhammad Ziaul(フセインモハンムドゥ ジアウル)さん(バングラデシュ人民共和国)が入学生総代として宣誓を行いました。

閉会後には、列席者、陪席の指導教員等を交えて記念撮影が行われ、入学生は、これからの学生生活に期待を膨らませていました。



入学生総代による宣誓



記念撮影

平成18年度教務学生事務担当者実務研修を実施

平成18年度教務学生事務担当者実務研修が、11月10日(金)、シンポジオンホールにおいて実施されました。

この研修は、本学の教務学生事務の実務を担当する職員に対し、本学職員としての資質の向上を目指し、教育・学生支援に関する業務の円滑な処理に必要な知識を習得させることにより、事務能率の向上に資することを目的として実施されたもので、教務学生事務実務担当者18名が参加しました。

研修では、豊田事務局長による講話「国立大学法人化後

の名古屋大学職員」の他、担当事務職員から学務部の業務内容、教務事務に係る法律問題、課外活動の現状等についての業務解説が行われました。

引き続き、教員による講演「本学の就職支援と課題」及びオフィスブルーजू代表の教育研修コンサルタントである山崎直美氏による講演「窓口におけるマナー」が行われました。就職の現状とそれを取り巻く環境についての説明など身近で実践的なテーマであるため、受講生以外にも多数の職員が聴講し、窓口対応の重要性を再認識する良い機会となりました。

最後に、事務能力向上と学生サービスの質的向上を目指すべく分科会が行われ、「学習・学生支援に関する諸問題」について自由に活発な意見交換が行われました。



講話をする豊田事務局長



講演をする山崎直美氏

技術職員研修（装置開発・計測制御コース）を実施



研修風景の様子

平成18年度技術職員研修が、10月4日(水)から6日(金)の3日間にわたり実施されました。

この研修は、本学の技術職員を対象に、必要な専門的知識及び技術を習得させることを目的として実施しており、今年度は、若手技術職員10名が研修生として参加しました。

1日目は、総務部人事労務課、知的財産部の幹部職員及び大学院工学研究科の教員の講義や、先輩の講話により知識の習得を行い、2日目以降は、全学技術センターの先輩技術職員による熱心な指導により、受講者個々の技術力が向上することを目標に、実践的な多出力直流電源の製作やメカトロニクス回路の実践と計測技術について事例研修を行いました。

アンケートには、「自己の能力を客観的に見直すことができた」等の意見があり、講師、受講者双方にとって、有意義な研修の機会となりました。

愛知地区国立大学法人等退職準備セミナーを開催



セミナーの様子

平成18年度愛知地区国立大学法人等退職準備セミナーが、10月27日(金)、シンポジオンホールにおいて、愛知教育大学、名古屋工業大学、豊橋技術科学大学、豊田工業高等専門学校、自然科学研究機構岡崎地区の5機関との共催により開催され、平成22年度までの定年等退職予定者とその配偶者合わせて149名の参加がありました。

今回のセミナーは、財団法人教職員生涯福祉財団から専門の講師を迎え、鈴木啓三講師による「生涯生活設計・退職後の生きがい」及び「退職後の健康管理」、設楽 徹講師による「共済年金・退職後の医療保険」、小池雅晴講師による「経済生活・資金運用」の講演が行われ、参加者は熱心に聴講しました。

講演終了後に設けた個別相談コーナーでは、多数の相談が寄せられるなど、参加者の関心の高さが伺われ、セミナーは盛況のうちに終了しました。

日本数学コンクール表彰式を挙行政



あいさつする大峯会長

平成18年度日本数学コンクール表彰式が、11月3日(金)、シンポジオンホールにおいて挙行政され、受賞者とその保護者等約120名が出席しました。

東海高校吹奏楽部による弦楽五重奏曲の演奏ではじまった表彰式では、本コンクール委員会の会長である大峯理事及び山田知子愛知県教育委員会指導主事からあいさつがあった後、日本数学コンクール、日本ジュニア数学コンクール、日本数学コンクール論文賞で優秀な成績を取めた受賞者に対し、大峯会長から賞状及び記念の楯、トロフィー、副賞が授与されました。大賞受賞者からは、中学1年生から毎年参加し6年目で大賞を受賞したことの喜びや、考えるプロセスが最高の時間であり、こうしたプロセスを今後の生活に活かして行きたい、と抱負が述べられました。

表彰式終了後には、恒例の「問題解説」が実施され、問題作成委員会の先生方から、解答と解答に辿り着く過程や考え方についての解説が行われ、参加した中高生と保護者は、メモを取りながら熱心に聞き入っていました。

超音波で探る海溝型巨大地震

田所 敬一 大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助教授

『東海・東南海・南海地震といった「海溝型巨大地震」の発生が近い』と耳にする機会が多くなりました。特に東南海地震は名古屋のすぐ沖合で発生するので、名古屋に住む我々にとっては他人事ではありません。

何事でもそうですが、遠くからただ眺めているよりも、近づいて観察した方が物事の詳細がより良く分かります。海溝型巨大地震についても同じことが言えます。海溝型巨大地震の震源域は、大部分が陸地から遠く離れた海域に存在します。ということは、海へ出て（海底で）観測することが不可欠なのです。その観測項目のひとつとして地殻変動観測が挙げられます。

地殻変動の観測といえば、カーナビや携帯電話でお馴染みのGPSが、近年盛んに用いられるようになってきました。GPS観測では人工衛星からの電波を受信するわけですが、電波は海水中を伝わるできません。したがって、今あるGPSの機械を海底に置いて観測することは、残念ながら不可能なのです。

そこで、私たちは、海底での地殻変動の観測を行うための新しいシステム（図1）を開発しました。このシステムは、あらかじめ海底に設置された「海底局」という観測装置と観測船（位置

はGPSによって正確に求められる）との間の距離を超音波によって測定し、海底局の位置を決める仕組みです。最近では、海底局の位置が3cmぐらいの精度で決まるようになってきました。これを繰り返し行うことによって、海底局の位置の変化から海底の地殻変動を割り出すことができます。海底局は、熊野灘と駿河湾に設置されており、船酔いと格闘しながら1～数ヶ月に1回の割合で観測を行っています。

2004年9月、このシステムの実力を示す出来事が起こりました。紀伊半島沖を震源とするマグニチュード7クラスの地震（愛知県、岐阜県、三重県などで震度5弱～4）が相次いで2つ発生しました。その場所は、熊野灘に設置している海底局から60kmぐらいの所でした。我々のシステムは、これらの地震による海底の地殻変動（南へ約18cm）を見事に検出しました（図2；赤矢印）。今後もこの観測を継続して行い、南海トラフで発生する巨大地震に関するデータを集めたいと思っています。

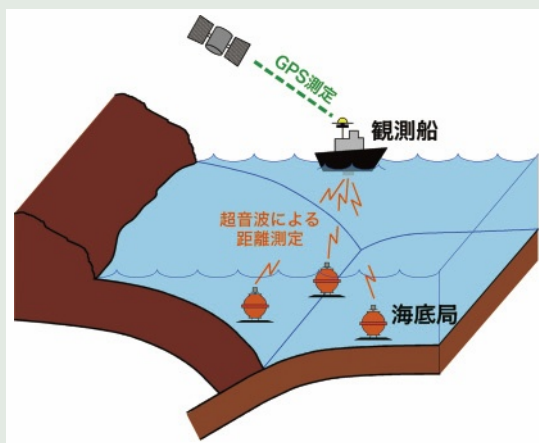


図1 海底での地殻変動観測システムの概念図

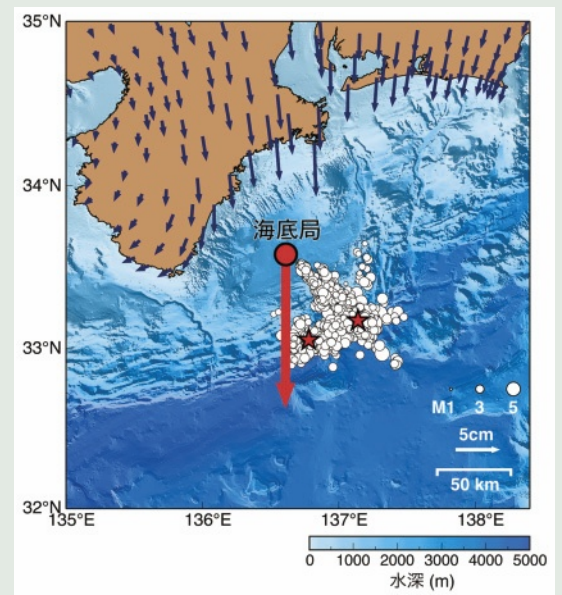


図2 2つのM7クラスの地震（赤星）による地殻変動（矢印）。陸上での地殻変動は、国土地理院のGPSでの観測による。小さい白丸は気象庁による余震の分布。

そもそも論をしましうか

総合企画室員
加藤 史征

現在、私は総合企画室という部署で働いています。主に新しい人事制度について人事労務課と協働して検討を進める作業をしています。ここはいわゆる「企画立案」を行う部署であると聞いています。

「企画立案」を行う上で、例えば新しい人事制度のなかでも「評価制度」のことについて考えていくとき、まず行うことは「そもそも評価ってなんだろうか？」ということを念頭に置きます。現状の評価制度の問題点を確認したり、他機関の動向を探ったり、いろいろ作業はありますが、まずは「そもそも論」から始めます。始めなければいけないと思っています。

なぜなら、新しい制度について企画立案しようとするとき、もともとの意味や、そこに込められた本来の意図を把握してからでないと、その制度は、基礎のしっかりしていない、土台の危うい欠陥住宅になってしまうからです。

これは企画立案する場合に限った話ではありません。学生に書類を交付する上で、教員に旅費を説明する上で、そもそもこの書類の必要性とは？そもそも旅費とは？と一度振り返ってみることは絶対無駄になりません。無駄にしようとする意思がない限り。

そもそも、「そもそも」ってどういう意味でしょうか？辞書には『(物事の) 最初。起り。どだい。』というような意味が書いてありました。「そもそも論」をする上で、こういう調べものは欠かせません。フリーの辞書をお気に入りに追加しておくとう便利です。

総合企画室において議論が開始されると、いつも「そもそも論」が激しく飛び交います。「そもそも、その組織を立ち上げたときの経緯はどうだったのか？」「そもそも研修とはなんぞや？」議論を深めていく上で、必要不可欠な過程です。

企画立案をするという部署の使命からでしょうか、総合企画室に来て、「そもそも論」をする機会が増えました。今までの仕事のやり方は、前年踏襲前例主義、何か問題が起ころうとも対処方法

は周囲の意見を聞くだけ、議論を深めて問題を突き詰めて考えるというようなことはしていませんでした。なぜならその方が楽だからです。勤務時間も短縮できます。周囲の先輩方には迷惑をおかけしたかもしれませんが、仕事は回りました。しかし、それだけでした。表面をなぞっただけの仕事をしていたような気がします。(あくまでも個人的な感想です。)

総合企画室の諸先輩方、上司はいつも考えます。「そもそも名古屋大学の理念とは？」「そもそも役員とは？」「そもそも、……？」「そもそも……」

「そもそも論」から始めることは、とても労力を使います。時間もかかります。しかし、物事の本質や根本的な問題などが、きっとそこから見えてくるのではないのでしょうか。

一度、自分の仕事について、「そもそも論」を試してみませんか？

……そもそも、この文章の趣旨ってなんでしたっけ？



職場にて

かとう のぶゆき
1975年12月8日生まれ

出雲路を駆ける(第18回出雲駅伝)



走り終えた選手

陸上部は、昨年12月に行われた東海学生駅伝において、最終区間のトラック勝負を1秒差で制し、63年ぶりの優勝を果たしました。その結果、三大学生駅伝のひとつである出雲駅伝の出場権を得ることができ、10月9日に、出雲路を走ってきました。

1区では、中村高洋（工学研究科博士課程前期課程1年）選手が序盤レースを牽引し、大会記録と区間新記録となる可能性のある高速駅伝を演出したのですが、本来の切れのある走りではなく、区間12位となりました。残念ながら、TV中継が中断されるアクシデントがあり、中村選手が活躍する姿はほとんど映りませんでした。その後の区間も、他地区の強豪大学の前に歯が立たず、必死に粘りましたが、単独大学16チーム、地区選抜5チーム参加中18位の結果に終わってしまいました。しかし、今回、全国の力を肌で感じたことで、チーム全体により刺激を得ることが出来ました。

また今年も、12月3日に、東海学生駅伝が行われます。出雲駅伝出場枠1つを争う勝負は既に始まっており、有力私立大が虎視眈々と優勝を狙っています。しかし、名大も昨年より着実に強くなっています。エース中村、内藤聖貴（理学研究科博士課程後期課程3年）両選手の強力2枚看板に加え、つなぎ区間を走る選手も底上げが進み、誰が走るかわからないほど力が均衡しています。長距離ランナーにとって、母校の襷を掛けて走る事は大きな目標であり、今年で最後となる4年生の大

会に掛ける思いは半端ではありません。しかし、その他のメンバーも黙ってはいないので、大会直前まで熾烈な選手争いが続くと思われます。

これから、大会が近づくにつれチームの雰囲気張り詰め緊迫していきます。この雰囲気こそ、練習量、質ではかなわない有力私立大に対抗する武器のひとつであり、金尾洋治監督、嘉賀正泰コーチ、天野実咲（文学部3年）マネージャーをはじめとするマネージャーさんのしっかりした支えによって保たれています。今の陸上部には、“今日は練習やりたくないなあ”という時でも、山の上に登れば“がんばらなきゃ”という気持ちにさせてくれる力があります。強くなるのは大変ですが、弱くなるのは簡単です。この雰囲気を壊さずに、いつまでも残していけるよう勤めていきたいです。



出雲神社を背に1区を駆ける中村高洋選手

第4回全日本学生フォーミュラ大会2位

大学院工学研究科マテリアル理工学専攻博士課程前期課程1年
秋山 友彦



2006年度開発マシン FEM03

私たち名古屋大学フォーミュラチーム FEM は 2006年9月に静岡県の小笠山総合運動公園（エコパ）にて開催された第4回全日本学生フォーミュラ大会に参戦し、全国50チーム中準優勝というタイトルを獲得しました。今までは、海外の大会への参戦経験と優れた技術・開発環境を持った関東の大学が常に上位を占めていましたが、今回はそんな多くの強豪チームを抑えて、東海地区の大学としては初めての2位という栄えある成績を残すことができました。チーム結成から3年目のまだ若いチームですが、逆境にも負けずに努力を重ね、時に何かを犠牲にしてまで勝利を目指しました。そんな私たちの活動をここにご紹介します。

私たちは2003年11月に活動を開始し、毎年夏に開催される本大会へ参戦するべく、競技用のフォーミュラカーをゼロから開発しています。一昨年の大会では総合12位とルーキー賞1位を頂き、昨年度は総合9位でした。そして2006年度現在は学部1年生から修士2年生まで約40名のメンバーで活動しております。

設計に関して先生やプロの人に手伝ってもらうことはルールで禁じられており、車両はすべて学生の手で開発されます。コンセプト立案に始まり、車両開発に必要な知識を学んでマシンを設計、そして工作機械や溶接機を使用して自分たちの手で造り上げていきます。また、この大会では設計技術の優劣を競う審査や、車両の生産コストの安さを競う審査、プレゼンテーション能力を競う審査

もあり、単に走って速いマシンを作るだけでは優勝できません。2006年度は特にこれら3つの審査での高得点が目標でした。またマシン自体も、扱いやすく信頼性の高い車両を目指して何度も走りこみ、そのポテンシャルが予想より高くなっていることに大会で初めて気がつきました。この時、チームの確かな成長を感じました。

最後に、今年度2位になれたのは幸運であったからであるとして再度気持ちを引き締め、他の強豪チームと肩を並べられるようになったという責任を感じ、私たちはこれからも不断の努力を続けて参ります。また、この活動を支援してくださる全ての方々へ今一度お礼申し上げます、ありがとうございました。



集合写真

あきやま ともひこ
1982年生まれ
愛知県出身

15. 赤崎記念研究館

赤崎記念研究館は、赤崎 勇特別教授が世界に先駆けて研究開発した青色発光ダイオードの開発にいたる学術成果を記念して、その功績を広く世に知らせ、その偉業を永く後世に伝え、学術創生の重要性を後に続く若い世代に継承すべく建設されました。

建物は、既存のインキュベーション施設とベンチャー・ビジネス・ラボラトリー棟の間に位置し、本建物を中心とした「産学官連携ゾーン」を形成していくにふさわしい配置としました。

本建物は学術のシーズ（種、もと）を発掘する場であり、隣接するベンチャー・ビジネス・ラボラトリーは、シーズを発掘する人材の育成を図る場であり、またインキュベーション施設はシーズを育て知の拠点として発展させる場です。これら3つの建物が一体的・有機的に機能することにより、このゾーンは名古屋大学における学術創生の一大拠点となり、産学官連携の拠点となることが期待されています。

本学では、この赤崎記念研究館を「青色発光ダイオードに関する特許実施料収入」により建設し

ました。また、この特許実施料収入は公募事業として研究奨励事業などを行っており、学術研究の進展にも大きく貢献しています。

建物1階は赤崎特別教授の研究成果を学内だけでなく一般の人々にも紹介する展示室、次世代の研究装置開発を行う装置開発ファクトリーを配置しました。展示室は160インチLEDディスプレイやパネル・実物展示が多く、学生が集まる北部厚生会館からも見られるようになっています。

2階は産学連携推進室（産学官連携推進本部、知的財産部、社会連携課）等事務室、打合せ・相談室を配置しています。

3階～5階の実験室は、次世代の技術開発・研究開発のための公募によるレンタルラボとし、物理系、化学系の研究実験室に対応できるよう整備されています。

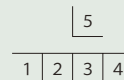
6階は赤崎特別教授室、秘書室、ミーティングルームを配置しています。屋上庭園にはウッドデッキの通路を設け、西に名古屋市内、東に東山の眺望や豊田講堂を望むことができます。

本建物は永く後世に残る記念施設となることから、南東面外装をレンガの風合いのタイル張りとし、重厚感と落ち着きを持たせています。また北西面外装はおもむきをかえ、レンタルラボのプロジェクト変更による実験機器の変更、増設等改修をしやすいための設備バルコニーを設け、これをアルミルーバーにて目隠ししています。

屋上には太陽光発電パネル（10kw）を設置し、1階展示室の160インチLEDディスプレイや実



- 1 外観（屋上に光る青色LED）
- 2 1階展示室
- 3 記念樹「ユズリハ」
- 4 フロア構成
- 5 赤崎勇特別教授室から臨む豊田講堂時計台



験機器等の電源として使用するとともに、屋上緑化を設け熱負荷の低減をはかり、地球環境保護の取り組みをしています。

室内は将来プロジェクト変更などによる壁の位置変更の自由度を高めるため、また、コンクリートの柱のない大空間をつくるために、床に工場生産の高強度コンクリートを使用したPC床板を採用しました。これにより東西約22m 南北約11.5mの無柱空間を実現しています。

基礎は建物の足元であり重要な構造部分です。本建物の基礎は、東山地区では初めての柱頭部鋼管巻きの場合打ちコンクリート拡底杭を採用しています。杭本数は18本、直径は上部で1.1~2.1m、下部で1.6~3.5m、深さは支持地盤が深いことから地上より約-44m（建物の高さ26.7m）、最大径の長期杭耐力（支える力）は15,900kN/本（1,621t/

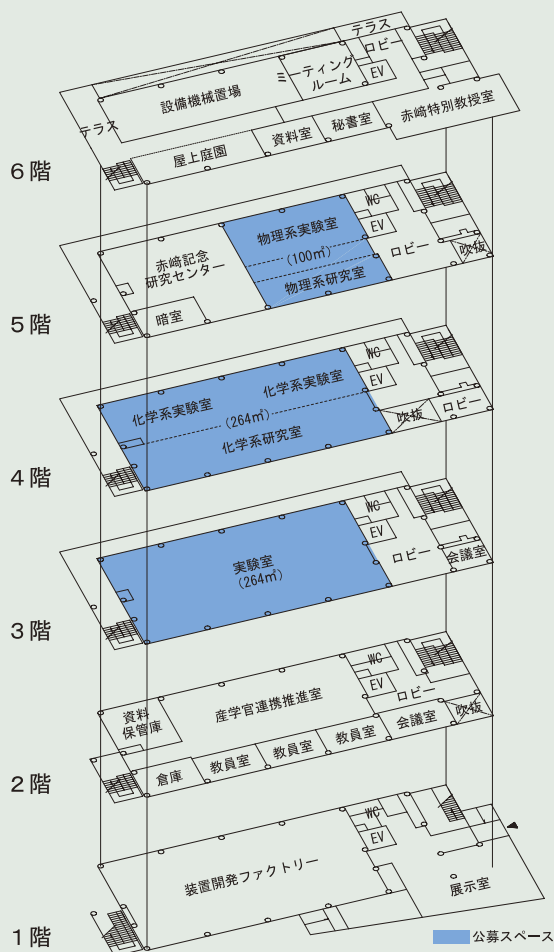
本）あります。この杭により、地震で建物が倒れようとする力に足元からしっかりと支えます。

記念研究館南側にある前庭は、産学官連携ゾーンの中央にあり、交流の広場としてゆとりのある広さ・空間が確保されています。

この前庭中央には「ユズリハ」の記念樹が植栽されています。赤崎特別教授の研究に対する情熱が絶え間なく後継者に継承されていくことを祈念して先生が選ばれたものです。植栽柵は先生の研究に関連の深い分子構造を模した六角形としました。

また、銘板石には赤崎特別教授の研究への強い思いを後生に伝えるため、直筆の文字で、「研究に王道なし」と彫り込まれています。

（施設管理部）



テクノ・フェア名大2006を開催 － 知の還元、産業の革新。－

●大学院工学研究科



展示ブース担当者(中)と意見交換する平野総長(右)及び澤木工学研究科長(左)



主催者を代表して挨拶する澤木工学研究科長

大学院工学研究科は、10月27日(金)、IB 電子情報館において、大学院環境学研究科、大学院情報科学研究科、エコトピア科学研究所及び大学院医学系研究科の共催を得て、「テクノ・フェア名大2006－知の還元、産業の革新。－」を開催しました。

これは、大学にある技術シーズ(種)の展示、研究室公開、講演会等を通じ、大学の研究成果を産業界等に広く公開し、より一層の産学官連携と地域産業の更なる活性化を推進することを目的として平成11年より毎年開催しているもので、7回目となる今回は、中部地区の経済界、報道関係者、企業の研究開発担当者等、約1,000名の来場がありました。

午前中に行われた基調講演では、主催者側を代表して澤木工学研究科長が「産学連携に新パラダイムを」と題し

た講演が行い、続いて、竹田美和同研究科教授が「光科学ナノファクトリー」と題し、本学が中心となって計画立案している小型シンクロトン光施設とその施設を利用した研究について、馬場嘉信同研究科教授が、「ナノテクノロジーのバイオ・医療応用」と題し、ナノテクノロジーを活用した医学と工学の連携による研究についての講演を行い、200名を超える聴講者は熱心に講演に耳を傾けていました。

午後からは、展示会場で紹介しているシーズの中から8つのシーズについて、研究者が直接、研究内容を説明するミニ講演も行われました。各講演には、多くの聴講者が詰めかけ、説明者の話をメモに取る聴講者の姿などが見受けられました。

研究室見学では、100名以上の見学希望があり、研究室の教員や大学院生の説明に聞き入っており、展示会場では、企業の研究開発担当者等が多数詰めかけ、各ブースの担当者による研究成果等の説明や実用化に向けての相談等について、活発な意見交換が行われるなど、企業側の本イベントに対する高い関心と大きな期待が感じられました。



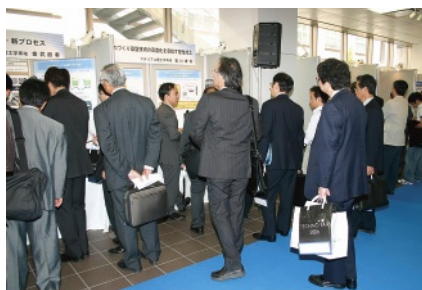
講演する竹田工学研究科教授



講演する馬場工学研究科教授



熱心に講演(ミニ講演)に耳を傾ける聴講者



多くの来場者で賑わう展示ブース会場



ブース担当者の説明に耳を傾ける赤崎特別教授

院生のための大学教授法研修会「シラバスを作ろう」を開催

●高等教育研究センター

高等教育研究センターは、11月15日(水)、文系総合館オープンホールにおいて、本学大学院生及びティーチング・アシスタント(TA)を対象とした今年度2回目の大学教授法研修会を開催しました。当日は、19名の大学院生が参加し、スナックやドリンクを片手に、活発な意見交換を行いました。

研究大学の大学院生は、将来、大学教員になる可能性が高いにも関わらず、日本ではこれまで組織的な教授法研修



研修会の様子

はほとんど行われておらず、身近なTA制度は、補助的な業務に限定されています。しかし、来年度から教員ポストの登竜門として助教が制度化されるように、大学院生に一定のティーチング能力が求められる時代になりつつあります。

今回の研修では、シラバス(授業計画)をどう書いたらよいかというテーマで2つのセッションをしました。最初に、近田政博同センター助教授が、「シラバスを書く前に必要なことー今日の大学生の学習状況と学習志向」と題し、大学院生と学部生の学習志向の違いに注目し、大学生がどのように知的発達するかについて紹介しました。続いて、鳥居朋子同センター助教授が「学習意欲を高めるシラバスの書き方」と題し、シラバスを書くことの意義や授業目標の表現方法などについて説明を行い、その後、ミニ演習を行いました。9月29日(金)に開催された第1回と併せて出席した大学院生には、戸田山同センター長から修了証が授与されました。本研修は来年度以降も開催する予定です。

※「研究大学」とは、行政政府が提供する競争的研究資金を多く獲得し、優れた研究・教育環境を整備し、研究と教育の両面で成果を上げている大学をいいます。

先端技術公開セミナーを開催

●大学院情報科学研究科

大学院情報科学研究科は、11月13日(月)、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリ3階ベンチャーホールにおいて、本学情報系COEとの共催で、先端技術公開セミナーを開催しました。

セミナーでは、末永康仁情報科学研究科教授のあいさつの後、NTTサイバーソリューション研究所所長の



講演する小川所長

小川克彦氏による「プロバン家電：ブロードバンド時代の情報家電」と題した講演を行いました。小川氏は、最近、光通信の普及によりブロードバンドのインターネットが浸透してきましたが、我が国の光通信の料金が世界一安価であることを指摘するとともに、それにふさわしい情報家電(プロバン家電)のあり方として、「単純」「簡単」「安心」の3要素を挙げ、ラジオ、テレビ、冷蔵庫、ホームセキュリティなど、プロバン家電のプロトタイプや、ジャズ演奏のライブ中継、介護予防の体操指導、子どもの見守りなど、プロバン家電を利用した新サービスのトライアルについて多数の例を紹介しました。また、新技術の開発だけでなく、それがどのように社会に受け入れられるかを考えたビジネスモデルも必要とし、腕時計型携帯電話など、同研究所における様々な研究成果についても紹介しました。

本セミナーには、本学教員、学生のみならず、企業、官公庁からも参加があり、約70人が熱心に聴講しました。

医学部解剖弔慰祭を挙行

医学部解剖弔慰祭が、10月19日(木)、挙行されました。この弔慰祭は、医学の教育研究のために御献体された故人を慰霊するため、毎年行われているもので、今年度も御遺族をはじめ、教職員、学生ら約400名が参列し、故人の御冥福をお祈りしました。

式典では、高橋雅英医学部長代理から、「医学への御献



慰霊の言葉を述べる高橋医学部長代理

体に対し心からの敬意と感謝の意を捧げるとともに、医学医療の進歩・発展及び医師・医学研究者の育成のために一層努力する覚悟である。」と慰霊のことばが述べられました。続いて、学生を代表して蝶野孝彦さんが「多くの方々の御協力のもとに医学を学べることに感謝し、御献体してくださった皆様の御遺志を無駄にしないよう今後とも勉学に励み、将来の医療の発展のために努めていきます。」と御霊と御遺族に対して誓いました。式典終了後には、解剖供養塔に御遺族、教職員、学生がお参りました。

なお、今回供養された献体数は、系統解剖42体、病理解剖33体で、医学部創設以来の献体総数は16,863体となりました。

高麗大学副総長が医学系研究科を視察

大学院医学系研究科は、10月31日(火)、大学間交流協定を締結している韓国の高麗大学から、Seung Kil Hong 副総長、Ji Tae Choung 医学部長、Hee Chul Han 副医学部長、Seung Ha Park 総務企画担当副学長、Soon Ho Um 教授の訪問を受けました。

1938年に創設された高麗大学医学部は、現在ではソウル市内及び郊外に三つの拠点病院(2,000床)を持ち、韓国でトップレベルの実績を誇っています。また、愛と人に優しい真の医療の追求、健康増進のための創造的な研究の推進、将来の核となる才能豊かな医療人・研究者の育成、相

互敬意と自尊心の養成、被災地及び貧困への救援(奉仕)を目標に掲げ、特に、国際交流を重視し海外提携校を積極的に拡大する戦略を明確にし、ワールドクラスの大学を目指しています。

まず、平野総長と Hong 副総長のあいさつがあり、その後、杉浦理事、濱口医学系研究科長、井口病院長、小林孝彰医学部講師、坂本純一医学系研究科教授とともに、双方の医学教育、研究及び臨床に関する現状と問題点を挙げ、今後の学術交流のあり方について意見交換を行いました。

その後、一行は、若林俊彦遺伝子・再生医療センター助教授の案内で同センターを視察し、Hong 副総長、Han 副医学部長と同じ専門領域を研究している水村和枝環境医学研究所教授による「痛み」に関する研究発表を聞きました。視察は、終始、和やかな雰囲気の中で行われ、医学の発展のためには、高麗大学、名古屋大学がアジアの中でリーダーシップを発揮しなければならないことを再確認し、今後の更なる学術交流の推進を約束して、すべての日程を終了しました。



意見交換の様子(左:左から、井口病院長、濱口研究科長、平野総長、杉浦理事、右:左から、Hee Chul Han 副医学部長、Seung Ha Park 総務企画担当副学長、Seung Kil Hong 副総長、Ji Tae Choung 医学部長、Soon Ho Um 教授)

平成18年度鶴舞公開講座を開催

－ここまで来ていたがん治療：少し安心、もっと勉強－

●医学部

医学部は、10月28日(土)、附属病院講堂において、「ここまで来ていたがん治療：少し安心、もっと勉強」をテーマに、平成18年度鶴舞公開講座を開催しました。

「がん」に関する医学研究が急速に進んでいる現在、「がん」の発症病態メカニズム、診断法と治療法の進歩、患者さんのQOL (Quality Of Life) に配慮した対応など、多



公開講座の様子

くの点で以前の常識が新しいものへと塗り変わりつつあります。さらに、「がんの治療」の近未来は想像以上のスピードで変貌し、その予後に対する明るい展望が開けようとしています。今年度は、このような背景の中、本学で基礎的・臨床的な専門研究を続けている専門家から「がん治療」の現状と将来像を、一般の方々を対象に分かりやすく紹介することを目的として開催されました。

当日は、濱嶋信之医学系研究科教授の司会のもと、西山幸廣同研究科教授による「ウイルスを用いた癌治療法の開発」、安藤雄一同研究科助教授による「外来でうけるがん薬物療法」、藤原道隆医学部助教授「ここまで進んだ低侵襲手術－傷の小さな手術でも癌は治るか？」の講演が行われ、一般の方々や同病院で加療中の患者さんをはじめ、行政・医療関係者など、85名が受講しました。

留学生のための就職支援セミナーを開催

●大学院国際開発研究科

大学院国際開発研究科は、10月31日(火)、同研究科8階多目的オーデトリウムにおいて、留学生向けの就職支援セミナーを開催しました。

留学生の中には、母国へ帰国する人々だけではなく、専門知識と日本語能力を活かして、日本で就職する人々も近年増加しています。また、少子化による人材確保における



セミナーの様子

困難性や、グローバル展開の対応などのため、留学生の採用に積極的に取り組む企業も増加しています。本セミナーは、こうした現状を踏まえ、留学生に日本での就職も卒業後の選択肢の一つとして考えてもらおう、という問題意識に立脚し、浅川晃広同研究科留学生担当講師が本学の「留学生特別事業経費」を活用する形で開催されたものです。

今回は、4回予定されているセミナーの第2回目で、就職支援を専門とするキャリア・ディベロップメント・アドバイザーの濱松美保氏、白戸絹江氏により、日本での就職活動の進め方やスケジュール、また、就職活動の際に必要なとされるマナーについて、具体的かつ詳細な説明が行われました。セミナー終了後も、個別に相談する参加者の姿が見られ、本セミナーに対する熱意が伺われました。

残り2回では、企業の人事担当者による留学生の就職実態や、人事担当者として留学生に期待することについての説明、また、元留学生で現在日本企業において就職されている方の体験談などが予定されています。

国際シンポジウム

「氷期サイクルの謎にせまる－氷河時代の気候ダイナミクス－」を開催

本学21世紀 COE プログラム「太陽・地球・生命圏相互作用系の変動学」は、11月13日(月)から15日(水)にわたり、シンポジオンホールにおいて、国際シンポジウム「氷期サイクルの謎にせまる－氷河時代の気候ダイナミクス－」を開催しました。

本シンポジウムは、氷床コア・堆積物コアを用いて地球の古環境を研究する観測的研究と、気候モデルによって気



シンポジウム発表者の集合写真

候のメカニズムを研究する気候モデル研究の二分野における国内外の著名な研究者が一堂に会する世界的にも珍しい試みでした。

1日目は、南極氷床コアについてジュゼール教授(フランス原子力委員会/国立科学研究センター)から包括的な報告がされるとともに、プロコペンコ サウスカロライナ大学特別研究員などからバイカル湖の堆積物コアによる研究結果が報告され、何万年前に遡って地球の気候を復元する試みについて活発な議論が行われました。

2日目以降は、真鍋淑郎本学客員教授から、気候の十万年周期と炭素循環が果たす役割が紹介されました。また、阿部彩子東京大学教授は、気候モデル内において大陸氷床の形成プロセスを示し、安成哲三本学地球水循環研究センター教授は、地球の軌道の変化に伴う気温と積雪の変化と、氷河期が生ずるプロセスについて発表しました。

何万年も前の気候を探る古気候の取り組みは、現在危惧される地球温暖化のメカニズムと密接な関係にあります。本シンポジウムは、こうした気候システムの理解に向けて観測と気候モデルの両分野が手を取り合って発展を目指す重要な契機となりました。

第23回、第24回防災アカデミーを開催

●災害対策室

第23回防災アカデミーが、10月16日(月)、環境総合館レクチャーホールにおいて開催されました。今回は、日本の耐震工学の第一人者として知られる岡田恒男東京大学名誉教授による「耐震補強のこれから」と題する講演が行われました。講演では、建物の地震被害の特徴、耐震基準の歴史の変遷、耐震化の現状、最新の耐震工法といった大変幅広い内容について解りやすい紹介があり、会場は97名もの参加者で満員となりました。

11月10日(金)には、第24回防災アカデミーが開催され、

中村豊東京工業大学客員教授・株式会社システムアンドデータリサーチ代表取締役による、「情報と地震防災」と題する講演が行われました。中村教授は、国鉄・JRで新幹線の地震警報システム開発を中心になって進められた方で、リアルタイム地震防災の世界的パイオニアとして知られています。講演には、企業などで地震情報を扱う仕事に従事している方が多数参加し、地震情報を社会に活かすためには何が重要なのか、という視点から、活発な質疑応答が行われました。この質疑応答は、多くの参加者にとっても大変有意義なものとなりました。

詳しくは、災害対策室ホームページ (<http://anshin.seis.nagoya-u.ac.jp/taisaku/>) をご覧ください。



講演する岡田東京大学名誉教授



講演する中村東京工業大学客員教授

「人に優しいバイオマス－最先端木材研究への招待－」を開催

●大学院生命農学研究科

大学院生命農学研究科は、10月7日(土)、「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」の一プログラムとして、「人に優しいバイオマス－最先端木材研究への招待－」を開催しました。

これは、科学研究費補助金による研究成果をわかりやすく発信することを通じて、中学生・高校生に対して学術と日常生活との関わりや学術が持つ意味に対する理解を深める機会を提供することを目的として実施されたもので、本プログラムでは、重要なバイオマス資源である木材のユ

ニークな特徴を、講演や施設見学、ミニ実験等を通じて、幅広いレベルで紹介しました。

まず、「ヒューマン・フレンド・バイオマスへの誘い」と題して、山本浩之生命農学研究科教授及び土川 覚同研究科教授の講演がありました。その後、参加者は、強度試験機、走査電子顕微鏡及び飛行時間型二次イオン質量分析装置を見学したり、解体材の曲げ強度測定実験を行いました。続いて、脱墨装置によって新聞紙からインクを除いて繊維を再生し、思い思いの葉書を作製しました。

本プログラムの最後に、松田同研究科長から、参加者に修了証書が手渡されました。今回は、参加者が4名と少なかったのですが、保護者及び高校の教員と一緒に熱心且つ真摯に取り組み、参画した教員、大学院生にとっても充実した一日になりました。



解体材の曲げ強度測定実験の様子



参加者及びスタッフで記念撮影

ICCAE 2006年度第7回オープンフォーラムを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センターは、10月20日(金)、野依記念学術交流館において、第7回オープンフォーラム「アフリカにおける稲作振興の現状と今後の日本の役割－NERICAの研究と普及を例として－」を開催しました。このフォーラムは、2003年9月に行われた第3回アフリカ開発会議(TICADⅢ)以降、サハラ以南アフリカ諸国に

おける食糧輸入依存問題を解決するために研究、開発している、アジア米稲とアフリカ稲の長所を組み合わせた陸稲“ネリカ米”の研究と普及を例に、現状分析と今後の取り組みについて議論するために開催されたものです。

基調講演では、オンヤンゴ同センター客員教授から、土壌の乾燥、適応品種の選定、在来技術を活かした栽培技術、農民教育と優良種子増産による普及の促進、行政の持続的な支援などについて分かりやすく説明があり、続いて、日本人研究者らから、イネの根の水ストレス耐性、日本の陸稲育種研究の成果、最新品種の紹介、農民教育の必要性等について研究報告がありました。最後に、国際農林水産業研究センター、国際協力機構及び笹川アフリカ協会より我が国の取り組みについての報告があり、外務省もこのような活動を強く支援していることが分かりました。

アフリカにおける米の生産力を今以上に向上させるには、まだ多くの問題がありますが、日本が総力を挙げて地道に取り組んでいくことが重要であることを確認できたフォーラムでした。



講演をするオンヤンゴ教授

第2回博物館国際フォーラム「次世代教育と国際連携」を開催



あいさつする平野総長

博物館は、11月1日(水)から4(土)の4日間、環境総合レクチャーホールを主会場として、第2回名古屋大学博物館国際フォーラム「次世代教育と国際連携」を開催しました。

このフォーラムは、2002年に実施した第1回博物館国際フォーラム(第1回はAC21のサテライトフォーラムとして実施)での姉妹校博物館及び国内外の関係博物館との議論・連携を踏まえ、次世代教育に関する現状と直面している問題点についての議論・意見交換を目的に実施したものです。

初日に行われた特別講演では、冒頭、平野総長の歓迎のあいさつがあり、引き続き、アメリカ科学博物館連盟理事長のワルター博士による「ティーンエイジャーと科学博物館」と題した基調講演が行われました。

また、開期前半の2日間は、大学博物館が行うべき次世代教育に関して、アメリカ、イギリス、ドイツ、オーストラリア、中国、韓国、モンゴルの姉妹校大学・博物館の専門家と、次世代教育に関する情報交換を行い、後半の2日間は、海外からの参加者を交え、次世代教育のための野外実習「地球教室」を実施し、実習方法等についての現地討論、意見交換を行いました。野外実習では、「河原の石でつくる石包丁」と題して、岐阜県鶯沼の木曾川沿い及び博物館野外観察園のセミナーハウスにおいて、一般から公募した参加者(親子)24人と国内外からの参加者との交流を含めた活動を行いました。特に今回の実習では、海外からの参加メンバーにも実習に加わってもらい、次世代教育の視点から野外実習の実施に関する具体的な内容について意見交換をしました。

本フォーラムには、国内外からの招聘者を含め40名程が参加し、野外実習も含めた次世代教育における大学博物館の役割や地域連携に関して、通訳を交えての活発な意見交換がなされました。



講演をするワルター博士

今後、今回の情報交換を基に、姉妹校大学博物館等との国際連携をさらに推進して行く予定です。



討論の様子



野外実習の様子

博物館が第63回、第64回特別講演会を開催

博物館は、11月8日(水)、第63回特別講演会「蔵書票入門：歴史から楽しみ方まで」を開催しました。

講演では、櫻井龍彦国際開発研究科教授が、蔵書票の起源から、歴史、技法、絵柄を読み解く楽しさまで、様々な図版を使用してわかりやすく解説し、「インターネット上で書物を読むことができる現代において、蔵書票は本に貼るという性格は薄れるだろうが、芸術品としては「紙の宝石」として愛され続けるだろう」と述べられました。

また、11月17日(金)、第64回特別講演会「李 平凡と

日中版画交流 - 1940~50年代を中心に -」が開催され、張 玉玲南山大学非常勤講師による講演が行われました。李 平凡氏は、中国天津生まれの木版画家で、戦中戦後に日本に滞在して神戸中華同文学校の美術教師を勤めて以来、版画を通じた日中交流に尽力しており、今回の企画展のために作品を寄贈されています。張講師は李氏の足跡を、戦中戦後の激動する世相になぞらせながら説明しました。

特別講演会は、10月24日(火)から12月23日(土)まで開催されている、第9回企画展「本に貼られた小さな美の世界 蔵書票」の開催期間中に4回行われ、本特別講演会は、第1回目及び2回目となります。

今回は、各40名程度の参加者があり、好評のうちに終了しました。



第63回特別講演会の様子



第64回特別講演会の様子

第23回オープンレクチャーを開催

● 附属図書館

附属図書館研究開発室は、11月10日(金)、同館5階多目的室において、第23回オープンレクチャーを開催しました。

これは、同室が掲げる図書館のハイブリッド化に関する研究開発及び学術情報流通についての今後の課題を主なテーマとして、平成14年度から学内外の方を対象に開催しているもので、23回目の今回は、逸村 裕筑波大学大学院

図書館情報メディア研究科教授(本学附属図書館研究開発室研究協力者)が、「ILLから見る図書館資源共有のパラダイムシフト」と題して講演を行いました。

講演では、国立情報学研究所(NII)が提供する図書館間相互貸借サービスであるNACSIS-ILLの1994年から2005年のログ約1050万件の詳細な分析から、我が国の大学図書館界を中心とした学術情報流通の変化についての報告がなされました。大学図書館界が長年にわたって行ってきた文献複写を中心とした図書館資源共有は、総合目録作成、マニュアル等の整備により発展を続けており、NACSIS-ILLを用いた文献複写件数は、2001年以降100万件を越え、なお微増を続けていること、また、一方で、電子ジャーナルの普及により、この様相が大きく変わりつつあることが報告されました。

講演終了後は、図書館間の相互貸借から浮き彫りにされた図書館利用者の行動の変化や、学術機関リポジトリやリンクリゾルバが果たす役割といった点を中心に、現在のオープンアクセス運動とこれからの図書館の役割について、図書館職員による現場の視点からの質疑と活発な意見交換が行われ、充実したレクチャーとなりました。



オープンレクチャーの様子

附属図書館が2006年秋季特別展を開催

江戸時代の村と地域－美濃養老・日比家文書にみる暮らしと災害－



展示会の様子

附属図書館及び附属図書館研究開発室は、9月29日(金)から10月20日(金)まで、2006年秋季特別展(地域貢献特別支援事業成果報告)「江戸時代の村と地域－美濃養老・日比家文書にみる暮らしと災害－」を開催しました。

日比家文書は、揖斐川中流域で活躍した豪農日比家に伝わる約5,000点の文書群で、木曾三川流域治水史料の宝庫として知られる同館所蔵の高木家文書(10万点超)とも密接な関係にあることから、昨年度、所蔵者の日比達男氏より本学に寄贈されたものです。日比家は、江戸期以降、美濃国石津郡沢田村(現岐阜県養老町沢田地区)の庄屋や旧養老村村長などを務めたことから、村や地域の運営に関する史料が多数含まれており、実際の展示も、①村の生活、②村の運営、③村と地域社会、④街道と幻の運河計画、⑤変わりゆく村、の5部構成で、当時の村と村人の動きを詳細にフォローした内容でした。



「木曾三川流域環境史」データベースの一画面

注目すべきは、琵琶湖と伊勢湾を結ぼうと計画された幕末の運河関係史料が見つかり、これまで未詳であった事業の実態解明が進んだことです。また、1631年(寛永8)から1871年(明治4)までの年貢免状(納税通知書)が、ほぼ欠年なく残されていたことも、地域環境史を探る上で貴重です。分析の結果、沢田村は、背後にある養老断層谷からの土石流と、前を流れる暴れ川、牧田川の氾濫という挟み撃ちに遭い、頻繁に年貢の減免措置を受けながらも、幕末段階では7割を超える村人が飢人となるなど、大変厳しい環境下にあったことが明らかになりました。その一方で、こうした環境と共存するため、土石流を発生させる谷の付け替え工事や、村人に崩壊地を貸与して治山対策を図る「兀留(はげどめ)証文」の工夫など、実に様々な減災措置がとられていたこともわかりました。

同館展示室には、こうした災害対応の史料のほか、沢田村が命運をかけた運河計画図や、2.5m四方もある水論裁許絵図など、江戸時代の村と村人が生き抜くため、どのような営みを続けてきたのかを物語る史料が満載で、熱心にメモをとる来場者の姿が印象的でした。

なお、特別展開催にあわせて、電子コレクション「エココレクションデータベース」のうち、「木曾三川流域環境史」がリニューアルされ、衛星画像や旧版地図、古絵図、3次元CGなどを充実させた形で公開されました。今後さらに、日比家文書など流域の歴史情報資源を順次搭載し、コンテンツを拡充しつつ、GIS機能の高度化が図られる予定です。(エココレクションデータベースは、<http://libst1.nul.nagoya-u.ac.jp/eco/index.html> でご覧いただけます。)

公開講座「数学アゴラ」秋期継続コースを開講

●大学院多元数理科学研究科



岡田教授による講義の様子

大学院多元数理科学研究科は、11月4日(土)、11日(土)、18日(土)、12月2日(土)の4日間、理学部1号館において、公開講座「数学アゴラ」秋期継続コースを開講しました。今回は、8月に行われた夏期集中コースと異なり、一つのテーマを少人数でじっくりと掘り下げて学ぶという趣旨で開催されました。対象は高校生及び高校教員で、東海3県から、高校生3名、高校教員17名の参加がありました。

岡田聡一同研究科教授による「整数の分割を数える」と題する講義では、まず、「母関数」の考え方について解説があり、参加者は、整数を何通りの組み合わせで表現できるか、という課題に対し、実際に手を動かして取り組むことで、様々な事実が判明することについて、興味深げに学んでいました。

講義の内容は、高校数学の知識があれば分かるものでしたが、高校教員にとっても生徒と一緒に未知の課題に取り組む貴重な体験になったようです。

地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」第4回講演会を開催

●大学院生命農学研究科附属農場



講演する小林教授

大学院生命農学研究科附属農場は、10月21日(土)、附属農場農業館において、地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」講演会の「地球のもう一つの成功者昆虫に学ぶ」の第4回(今年度最終回)を開催しました。

今回は、小林迪弘同研究科教授が、「ウイルスと昆虫の戦い」と題して、ウイルスが昆虫に感染するときに繰り返される、両者の巧妙な駆け引きについて講演しました。

ウイルスには、動物、昆虫、植物、さらに微生物に感染する多くの種類が存在します。講演では、まず、ウイルスの発見から今日に至る研究の歴史、ウイルスの性質などについて説明があり、さらにウイルスが昆虫に感染し、病気を引き起こす仕組みについて紹介がありました。また、昆虫ウイルスを用いた害虫の防除、ウイルスを用いた有用タンパク質の生産など、ウイルスの利用研究についても紹介しました。講演会には、30名ほどの参加者があり、講演後には熱心な質疑が交わされました。

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
1 坪木和久・地球水循環研究センター助教授による解析で、9月17日、宮崎県延岡市で発生し死者3人を出した竜巻は、1999年に愛知県豊橋市で起きた国内最大級の竜巻と発生状況が酷似していることが判明	10.16 (月)	読売
2 中部の医療 心の健康：尾崎紀夫・医学系研究科教授は、うつ病を克服するには家族の協力が欠かせないが、「家族は本人の話を『まずは聞こう』という姿勢を大事にし、むやみに励ましたりせず、治療の進め方などについて、本人とじっくり話し合うことが大切だ」と話す	10.16 (月)	読売
3 水谷榮彦・本学名誉教授と本学医学部の研究グループは、血圧を上昇させるホルモンを破壊する酵素の大量培養に成功：胎児に影響を及ぼさない妊娠高血圧症の治療薬につながるかと期待される	10.16 (月)	朝日 (夕刊)
4 国立大入試変動の後期：本学では、来春の入試から法学部・工学部など5学部で後期試験を廃止する	10.16 (月) 11.11 (土)	朝日 (夕刊) 読売
5 「名大サロン」50回目を迎えて：運営委員の塩村耕・文学研究科教授、戸田山和久・情報科学研究科附属組込みシステム研究センター教授、黒田光太郎・工学研究科教授、福井康雄・理学研究科教授、唐澤かおり・東京大学助教授と樋口敬二・本学名誉教授が、50回を振り返り、成果や今後の展望について語り合った	10.17 (火)	中日 (朝刊)
6 「子育て支援のための公開シンポジウム」21日開催：早川昌弘・医学部附属病院周産母子センター副部長と古田恵香・同センター副看護師長が医療の現状を報告する	10.17 (火)	朝日 (朝刊)
7 環境学研究科竹内研究室は、NPO 法人「中部リサイクル運動市民の会」と連携してリユース瓶の利用状況を調査：河本広大さん・本学大学院生は、「リユース瓶は洗浄して数十回以上使えば、環境に優しい。ペットボトルの普及により存在感が薄れてしまった。実験でリユース瓶の普及の可能性などを探りたい」と話す	10.17 (火)	中日 (朝刊)
8 時のおもり：総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授 文化こそが最大の国防	10.17 (火)	中日 (朝刊)
9 教育再生会議座長の理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授に聞く：自分で得た情報を体系的に整理し、知識を知恵に変える想像力を自発的に発揮できるようにならないといけない	10.18 (水)	中日 (朝刊)
10 赤崎勇・本学特別教授と青色発光ダイオードを共同開発した豊田合成が、「赤崎記念研究館」に160インチの大型LED ディスプレーを寄贈すると発表	10.18 (水)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊)
11 一般公開セミナー「南海トラフの巨大地震を解き明かす」28日開催：安藤雅孝・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授ら3人による講演など	10.18 (水)	読売
12 江戸面白本の世界：名古屋藩儒旧蔵の稀書 塩村耕・文学研究科教授	10.18 (水)	中日 (朝刊)
13 訃報：平野秩夫・本学名誉教授	10.18 (水)	中日 (朝刊)
14 18日、「教育再生会議」の初会合が開催され、座長の理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授は、会議においては「基礎学力だけでなく人との対話力を」と述べ、座長記者会見を行う	10.18 (水) 10.19 (木)	朝日 (夕刊) 他4社
15 公開シンポジウム「化学と生物がきりひろく世界」(日本農芸化学会中部支部第147回例会) 21日開催：松岡信・生物機能開発利用研究センター教授による講演など	10.19 (木)	中日 (朝刊)
16 わが友わが母校：名古屋大学 南川秀樹・環境省地球環境局長 陸上部で駅伝に打ち込み、全日本大学駅伝には3回出場	10.20 (金)	日刊工業
17 医療ルネサンス：耳鳴りの治療 医学部附属病院では、2004年1月から今年6月まで、突発性難聴患者32人にステロイド鼓室内注入を行ったところ、13人は聴力がある程度改善し、耳鳴りも8人が改善 中島務・医学系研究科教授は、「一般的な治療で効果がないケースでは、鼓室内注入は試みる価値がある」と話す	10.20 (金)	読売
18 あしなが学生募金事務局の学生が中日新聞を訪れる：同事務局次長東海担当の野崎俊平さん・本学学生が遺児への支援を訴えた	10.20 (金) 10.21 (土)	中日 (朝刊) 読売 朝日 (朝刊)
19 「愛知の教育を考える集い」21日開催：中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授が犬山市の教育改革に関して報告を行う	10.20 (金)	中日 (朝刊)
20 指導していた学生へのセクシュアル・ハラスメントなどを理由に、本学より停職処分を受けた大学院教授が、本学への処分の取り消しを求めた訴訟の控訴審判決で、19日、名古屋高裁は、懲戒処分の取り消しを命じた佐分利晴夫理事は、「事実関係を慎重に調査するとともに、判決を検討する」としている	10.20 (金)	中日 (朝刊) 他4社
21 「巨大地震」を知ろう公開セミナー28日開催：一般公開セミナーでは、安藤雅孝・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授らによる巨大地震の発生の仕組み等の講演を行う	10.20 (金)	朝日 (夕刊)
22 「赤崎記念研究館」が20日に開館：青色発光ダイオードを世界で初めて開発した赤崎勇・本学名誉教授の研究業績を紹介し、最先端の科学技術の拠点となるよう建設	10.21 (土) 10.22 (日) 10.23 (月)	中日 (朝刊) 他2社 朝日 (朝刊) 日刊工業
23 鷲谷威・環境学研究科助教授らの研究グループは、東海地震の地震を引き起こす地殻の「ひずみエネルギー」が従来考えられていたものよりも高まっていない可能性が高いことを突き止めた	10.22 (日) 10.29 (日)	読売 中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
24 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 極楽浄土の観想	10.22 (日)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
25 「ペルシャ文明展」の開催を記念して、22日中西久枝・国際開発研究科教授が「イランの中のペルシャ 日常生活のペルシャ文化」をテーマに講演	10.23 (月)	朝日 (朝刊)
26 「数理ウェーブ」28日開催：大沢健夫・多元数理科学研究科教授が、「極小曲面に関する藤本理論」と題して講演	10.23 (月)	中日 (朝刊)
27 名大サロンの主役：森際康友・法学研究科教授が、「元気な社会における法とは何か」について話す	10.24 (火)	中日 (朝刊)
28 西山幸廣・医学系研究科教授が、「ヘルペスウイルスの機構解析と臨床応用」の研究で持田記念学術賞を受賞	10.24 (火)	中日
29 平野眞一総長が米国セラミックス学会から「生涯栄誉会員賞」を受賞：日本人の受賞は7人目	10.25 (水)	中日 (朝刊)
	10.31 (火)	日刊工業 日刊工業
30 本学は24日、長期間無断欠勤していた課長補佐の男性職員を9月30日付けで懲戒解雇処分したことを発表	10.25 (水)	朝日 (朝刊) 他2社
31 ボストン美術館企画検討委員会の初会合が開かれる：清水裕之・環境学研究科教授が参加	10.25 (水)	朝日 (朝刊)
32 「公開シンポジウム・教育基本法改定を語る」29日開催：植田健男・教育発達科学研究科教授らが問題点や今後の動向を語る	10.25 (水)	朝日 (夕刊)
33 本学の工学部長も構成員である8大学工学部長懇談会が、大学の博士課程者向けの「アカデミック SNS」を開発し、サービスを開始したことを発表	10.26 (木)	日刊工業
34 「テクノ・フェア名大2006」27日開催：本学工学研究科が工学系研究シーズを展示	10.26 (木)	中日 (朝刊)
	10.29 (日)	中日 (朝刊)
35 意表つく星たちの芝居：総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授より、読書紹介	10.26 (木)	朝日 (朝刊)
36 ミツバチのゲノムを本学の研究者も参加している国際研究チームが解読	10.26 (木)	朝日 (夕刊)
	10.27 (金)	日刊工業
37 文部科学省の「女子中高生理系進路選択支援事業」の実施機関に本学が選ばれる：事業内容は、公開授業・意見交換会・交流会	10.27 (金)	日刊工業
	11. 8 (水)	毎日 (朝刊)
38 「受験対策」ツケは生徒に：植田健男・教育発達科学研究科教授は、国が世界史だけを必修指定することに疑問を呈し、各学校が選択を行ったり、比重の取り方を考えた方がよく、教育委員会が未履修の問題を知らなかったとは考えにくいという考えを示した	10.27 (金)	中日 (朝刊)
39 31日から地震学会：プレイベントでは、安藤雅孝・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授が講演 鈴木康弘・環境学研究科教授、鷲谷威・環境学研究科助教授らが発表を行う	10.27 (金)	中日 (朝刊)
	11. 1 (水)	中日 (朝刊)
40 健康講座「痛みのケア」：11月4・11・18日大幸医療センターにて、熊澤孝朗・本学名誉教授が講演を行う	10.27 (金)	中日 (朝刊)
41 「日本福祉大知多半島総合研究所の第19回歴史・民族部研究集会」4日開催：堀田典裕・工学研究科助手らが講演	10.27 (金)	中日 (夕刊)
42 金森博雄・本学客員教授が文化功労者として選ばれる	10.27 (金)	毎日 (夕刊)
		中日 (夕刊)
	10.28 (土)	中日 (朝刊)
43 押田芳治・医学系研究科教授らが、毎日一万歩以上歩くとメタボリックシンドロームの予防につながりそうだと、27日発表	10.28 (土)	朝日 (夕刊)
44 書籍：『いま活断層が危ない―中部の内陸直下型地震』安藤雅孝・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授、 田所敬一・同センター助教授、林能成・同センター助手、木村玲欧・同センター助手編著	10.29 (日)	中日 (朝刊)
	11.14 (火)	中日 (夕刊)
45 臓器移植法施行以来、49例目の脳死判定が行われ、肝臓が医学部附属病院で移植される	10.29 (日)	中日 (朝刊)
		他2社
46 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 阿弥陀仏の極楽浄土	10.29 (日)	中日 (朝刊)
47 「痛みを知る」教育が必要：田代俊孝・医学部倫理委員は、「いのちの教育」の必要性を訴える	10.29 (日)	中日 (朝刊)
48 かがく Cafe：総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授が疑似科学やオカルトに人々がひかれる背景には社会状況があると指摘する	10.29 (日)	日経 (朝刊)
49 医学部附属病院で行われた肝臓の移植手術が29日無事終了：木内哲也・医学系研究科教授らによると術後の経過は順調	10.30 (月)	中日 (朝刊)
		他3社
50 森川高行・環境学研究科附属交通・都市国際研究センター教授は、「環境に良い車に乗ることがステータスとなるよう消費者の価値観が変わらなければメーカーが変わらない。居住空間が高密度化する未来の社会では、自由気ままに走行できる無制限な個別輸送機関での移動は無理がある」と話す	10.30 (月)	日経 (朝刊)
51 12月2日中学生・高校生を対象とした「ひらめき☆ときめきサイエンス」「ナメクジウオ類の進化のなぞに迫る」が開催される	10.30 (月)	中日 (朝刊)
52 伊藤忠商事は国内の大学としては初めて本学と産学連携協定を締結し、本学の研究成果を同社の関連企業に紹介し、新技術開発につなげる	10.30 (月)	日経 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
53 1944年の東南海地震遠州灘まで震源域か：安藤雅孝・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授は、「東南海地震は、東南海、南海地震と連動型の可能性もある」と指摘	10.31 (火)	中日 (朝刊)
54 本学基盤情報センターと日本女子大とエミットジャパンが共同研究を行い、卒業生のデータ蓄積による「eポートフォリオ」を活用した人材育成システムを開発した	10.31 (火)	日刊工業
55 「航空宇宙等次世代産業セミナー」1日開催：松崎雄嗣・本学名誉教授が講演	10.31 (火)	日刊工業
56 金田新氏・本学卒業生が、NHK 新理事に：NHK の公共放送としての志は揺らがないと語る	10.31 (火)	サンケイ
57 田中周一さん・本学学生が角界入り：大相撲の千賀ノ浦部屋に入門するため、新弟子検査を受検	10.31 (火) 11. 2 (木) 11. 3 (金) 11.10 (金)	中日 (朝刊) 読売 中日 (朝刊) 他5社 朝日 (朝刊)
58 イオン液体の実力：松見紀佳・生命農学研究科助教授らは、リチウムイオンだけを高速に輸送する物質を開発した	10.31 (火)	中日 (夕刊)
59 核と向き合う：総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授 国家からの誘惑を排除し科学者は「非核」声明を	10.31 (火)	朝日 (夕刊)
60 身近な活断層：安藤雅孝・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授 1854年の「伊賀上野地震」は木津川断層が震源であり、次の東南海・南海地震の発生を目前に、内陸地震にも十分な注意が必要と語る	11. 1 (水)	中日 (朝刊)
61 木股文昭・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授らの調査で、今年5月のインドネシア・ジャワ島中部地震で、実際には発生しなかった津波を恐れて救助が遅滞していたことが分かった	11. 1 (水)	中日 (朝刊)
62 江戸面白本の世界：塩村耕・文学研究科教授 江戸時代の子どもの遊びやそれらを見ることを好んだ大人について	11. 1 (水)	中日 (朝刊)
63 道家紀志・本学名誉教授が、学術や芸術の分野で活躍した人に贈られる紫綬褒章を受章	11. 1 (水) 11. 2 (木)	朝日 (夕刊) 中日 (朝刊) 他4社
64 インド美術仏教美術研究会：安藤房江さん・本学大学院生が「雲岡石窟初期・中期窟～交脚菩薩像を中心に」について話す	11. 1 (水)	朝日 (夕刊)
65 学費のため万引：「学費を払うお金が欲しかった」と万引きしたとして盗みなどの罪に問われたベトナム人留学生である本学学生に対して、名古屋地裁が懲役1年6月を言い渡した	11. 1 (水)	中日 (夕刊)
66 今津孝次郎・教育発達科学研究科教授が、「いじめは必ずあるという前提に立ち、学校が反いじめ指針・対策を作るべきと話す	11. 2 (木)	中日 (朝刊)
67 スマトラ沖地震の破壊力の教訓を生かせ：田中重好・環境学研究科教授、木村玲欧・環境学研究科附属地震火山・防災センター助手のチームは社会・心理学的に地震災害にアプローチする研究を進めている	11. 2 (木)	中日 (朝刊)
68 加藤延夫・元総長が2006年秋の叙勲で瑞宝大綬章を受章	11. 3 (金)	中日 (朝刊) 他4社
69 森郁恵・理学研究科教授、久原篤・理学研究科助手、児玉英志さん・本学大学院生らの研究チームが線虫の神経回路の働きを解明	11. 3 (木) 11. 8 (水) 11. 9 (木)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊) 日刊工業 日刊工業
70 中小企業金融自治体主導で：家森信善・経済学研究科教授は、地方分権の流れの中で、中小企業金融を活性化していくには、地方自治体が主体的な役割を担う必要があると指摘する	11. 3 (金)	読売
71 DNA の伸び縮み1分子レベルで観察することに成功：馬場嘉信・工学研究科教授、藤吉健太郎さん・本学大学院生ら	11. 6 (月)	日刊工業
72 宇宙のごみ除去研究：佐宗章弘・工学研究科教授 宇宙空間に漂うごみをレーザーで除去する方法を研究	11. 7 (火)	中日 (朝刊)
73 本学は南山大学、トヨタ自動車などと共同で、応用力の高いソフトウェア開発人材育成プロジェクトをスタート	11. 7 (火)	日刊工業
74 沖繩・ガマ体験「暗闇で平和考えた」：楊韜さん・本学大学院生	11. 7 (火)	中日 (朝刊)
75 秋の叙勲親授式が7日開催：加藤延夫・元総長が出席	11. 7 (火)	中日 (朝刊) 読売
76 江戸面白本の世界：塩村耕・文学研究科教授 江戸時代の善悪を明快に表してある子ども向けの教訓絵本の紹介	11. 8 (水)	中日 (朝刊)
77 地震は日本の文化です：本学で留学生を対象にした地震防災の説明会が行われた	11. 8 (水)	朝日 (朝刊)
78 坪木和久・地球水循環研究センター助教授は、北海道で起きた竜巻は国内最大規模の竜巻であり、発達した積乱雲が原因だった可能性があると分析し、「竜巻は平野部が多いが、どこでも発生するため、台風などの大きな気象現象が起きているときは、どこでも注意が必要」と語る	11. 8 (水)	朝日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
79 「道三から信長へ」展に関連する講演会で、三鬼清一郎・本学名誉教授が講演する	11. 8 (水)	朝日 (夕刊)
80 本学医学部にて、シンポジウム「地域で取り組むプライマリ・ケア」が18日開催	11. 9 (木)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
81 日本版ツイスター時代到来? : 上田博・地球水循環研究センター教授は、温暖化と竜巻の科学的な裏付けはまだないが、今後佐呂間クラスの竜巻が短い間隔で発生してくる可能性を指摘	11. 9 (木)	東京新聞
82 書籍:『会社は誰のために』伊藤忠商事株式会社取締役会長・丹羽宇一郎・全学同窓会副会長著	11. 9 (木)	朝日 (夕刊)
83 オフタイム:名古屋市交通局長・吉井信雄・本学同窓生:東洋医学に夢中、はりで「気力」を養う日々	11. 9 (木)	日経 (朝刊)
84 トヨタ自動車名誉会長・豊田章一郎・全学同窓会会長が「ウッドロー・ウィルソン賞」を授賞	11.10 (金)	読売
85 ウッドフレンズが高橋隆・医学系研究科教授が取締役に就任している本学系の医療ベンチャー企業への出資を引き受けた	11.10 (金)	日経 (朝刊)
86 老年学:井口昭久・医学系研究科教授 70代、あなたの心理的なタイプは?	11.10 (金)	朝日 (朝刊)
87 東海地方10月の地震:林能成・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助手	11.10 (金)	読売
88 食欲抑制ホルモンがストレスが多いと増進することを、豊嶋英明・医学系研究科教授ら公衆衛生学チームが発見	11.11 (土)	中日 (朝刊)
89 今津孝次郎・教育発達科学研究科教授が、外国籍の子どもに対する保育園における日本語教育の必要性を語る	11.11 (土)	中日 (夕刊)
90 名古屋大学協力会セミナー〈医学系〉18日開催:河村守雄・医学系研究科教授による「腰痛予防運動の展開」	11.11 (土)	中日 (朝刊)
91 叙位叙勲:従六位 稲山辰男・元本学生命農学研究科附属農場事務長	11.11 (土)	中日 (朝刊)
92 ほとけたちのイメージを探る:宮治昭・文学研究科教授 龍門石窟の盧舎那仏 気品と威厳感じる顔	11.12 (日)	中日 (朝刊)
93 中日新聞を読んで:痛み、分かち合う記事を 中西久枝・国際開発研究科教授	11.12 (日)	中日 (朝刊)
94 かがく Cafe:川合伸幸・情報科学研究科助教授が、人間の認知能力はどこから生まれるのか、情報をまとめて処理するチャンクという能力が脳の高度な働きのカギを握ると語る	11.12 (日)	日経 (朝刊)
95 わくわく探検 氷は歴史を知っている:上田豊・環境学研究科教授が子ども記者の取材にこたえる	11.12 (日)	中日 (朝刊)
96 元気のひけつ 体をやわらかく:鈴木重行・医学系研究科教授が、広汎性侵害抑制調整という体の仕組みをつかった治療方法を紹介	11.12 (日)	朝日 (朝刊)
97 名大サロンの主役:速水敏彦・教育発達科学研究科教授が、「若者に誇張と萎縮の側面がある」と話す	11.14 (火)	中日 (朝刊)
98 本学出身力士「舁名大」初土俵	11.14 (火)	中日 (夕刊)
	11.15 (水)	朝日 (朝刊)
99 江戸面白本の世界:国学者の随想の名品 子の遊ぶ姿生き生き 塩村耕・文学研究科教授	11.15 (水)	中日 (朝刊)

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

10月24日(火)～12月23日(土)

場 所：博物館展示室

時 間：10時～16時

休 館 日：日・月曜日

入 場 料：無料

第9回名古屋大学博物館企画展

テ ー マ：「本に貼られた小さな美の世界 ～蔵書票～」



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

12月17日(日)、18日(月)、19日(火)、

21日(木)、26日(火)、27日(水)

場 所：文系総合館

カンファレンスホール

2006年度国際学術シンポジウム

テ ー マ：「中国における社会経済インフラとビジネス環境」

内 容：中国経済ならびに中国ビジネスに関する14テーマのそれぞれについて、大学院経済学研究科と学術交流協定を締結している中国・北京理工大学管理経済学院及び西南交通大学経済管理学院の教授陣が講演します。また、各テーマにつき数十名程度の少人数の参加者によるシンポジウムも予定しています。

[問い合わせ先]

附属国際経済政策研究センター

052-789-5456

12月19日(火)

時 間：15時30分～17時30分

場 所：生命農学研究科 A 棟238号室

平成18年度第7回オープンセミナー

演 題：「ストレス生理学的研究とケニアにおける陸稲（ネリカ米）生産の展望」

講 師：John C. Onyango（マセノ大学理学部長（ケニア）、ICCAE 客員教授）

[問い合わせ先]

農学国際教育協力研究センター

浅沼修一教授 052-789-4232

12月19日(火)

場 所：博物館展示室

時 間：13時30分～15時

入 場 料：無料

第17回博物館コンサート (NUMCo)

タイトル：「アイルランド音楽へのいざない」

演 奏 者：小松 大（アイルリッシュフィドル）、長谷川彰子（チェロ）



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

12月19日(火)

場 所：博物館講義室

時 間：15時～16時30分

入 場 料：無料

第66回特別講演会

演 題：「蔵書票の図像学」

講 師：鈴木繁夫（国際言語文化研究科教授）

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

12月21日(木)

場 所：環境総合館1階

レクチャーホール

時 間：17時30分～19時

入 場 料：無料

第25回防災アカデミー

演 題：「南海トラフ巨大地震の残された謎」

講 師：安藤雅孝（環境学研究所附属地震火山・防災研究センター教授）

[問い合わせ先]

災害対策室 052-788-6038



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

1月13日(土)

場 所：経済学部
カンファレンスホール
時 間：10時～12時

オープンカレッジ・自由奔放！サイエンス

演 題：「アジア諸国に対する法整備支援—名古屋大学の挑戦」
講 師：鮎京正訓（法学研究科教授）

[問い合わせ先]

経済学部・経済学研究科
エクステンションサービス

1月16日(火)

場 所：環境総合館1階
レクチャーホール
時 間：17時30分～19時
入 場 料：無料

第26回防災アカデミー

演 題：未定
講 師：西澤泰彦（環境学研究科助教授）

[問い合わせ先]

災害対策室 052-788-6038

1月23日(火)～2月24日(土)

場 所：博物館展示室
時 間：10時～16時
休 館 日：日・月曜日
入 場 料：無料

第10回名古屋大学博物館企画展

テ ー マ：「名大キャンパスの野鳥」

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

1月27日(土)

場 所：経済学部
カンファレンスホール
時 間：10時～12時

オープンカレッジ・自由奔放！サイエンス

演 題：「大学の紀元と変容」
講 師：阿曾沼明裕（教育発達科学研究科助教授）

[問い合わせ先]

経済学部・経済学研究科
エクステンションサービス

名大トピックス No.163 平成18年12月15日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

表紙

機能美を誇る理学館
（平成18年11月29日）



名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
（<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>）でもご覧いただけます。

56 豊田講堂地階倉庫

本学のシンボルの一つでもある豊田講堂については、本連載で何度か取り上げました。今回は、少し角度をかえて豊田講堂の地階倉庫について取り上げます。

一般の人々にはあまり知られていませんが、豊田講堂のロビーやピロティの下（地階）には、総面積約500㎡の倉庫エリアがあります（写真1、2）。本連載36号で紹介した「田村模型」は、2005（平成17）年2月にこの地階倉庫内で発見されたものです（写真3）。

ところで、1960年に竣工した豊田講堂は、2006年12月から約1年の工期予定で、大規模な改修工事を受けることになっています。これに先立って、今年の夏から秋にかけて豊田講堂内の備品等の整理・搬出作業が断続的に行われました。その際、大学文書資料室では、「田村模型」の事例もあるため、特に地階倉庫内で人目につかず長年保存されている大学史関連の資料が存在するのではないかと半ば期待を寄せていました。

事務局職員の手で進められた整理作業では多くの備品類とともに古い事務文書や印刷物在庫などの存在が確認され、それらのうち記録史料としての価値が認められるものについては大学文書資料室で保管することになりました。

写真4の豊田講堂の油彩画は、この整理作業で存在が確認されたものです。この油彩画は、木製の額に入れられていますが、作者ならびに制作時期は不明です。豊田講堂の手前（西）側に描かれているバス停周辺の景色から判断して、竣工数年後の様子を描いたものだと思います。

竣工後46年を経た豊田講堂は、時の流れとともにその地階倉庫部分がタイムカプセルのような役割を果たしたともいえるのではないのでしょうか。今回の改修後、現在の地階倉庫部分のうち約2/3の部分が控室として整備される予定ですが、残る倉庫部分にまた新たなタイムカプセルが生まれることがあるのかもしれませんが。



1	2
3	4

- 1、2 豊田講堂の地階倉庫入口
および倉庫内の通路
- 3 発見された当時の「田村模型」
- 4 豊田講堂画（油彩、F15号）